
salamander

柳岸カモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

salamander

【Nコード】

N9656D

【作者名】

柳岸力毛

【あらすじ】

僕の住む星は美しい。僕の生きる道は、美しい。

僕の住む星は美しい。

北では夜毎に白雨が降り、

南では灼熱の愛撫が生物の体温を上昇させている。

中央の大地には長い長い亀裂が走り、

山や谷が不揃いに並んでいる。

そこでは数え切れほどたくさんの「唄」が作られているらしい。

星の形は球。

ボールのことだ。

その球体の星の真ん中に一本の串が刺さっていて、
それを軸にして全体がくるくる廻っている。

（なんだそれ。だんごかよ。）

生物の資料集をばたりと閉じて、教室を見わたした。

退屈な授業。

退屈な時間。

まわりのみんなだつて僕と同じ。

熱心に授業をきいているってわけじゃあ、ないんだ。

メール、睡眠。

はやめの食事。

みんなそれぞれに、やることが山積みなのだ。

僕の視界にちょうど入る、あの子だつてそう。

さっきからゆらゆら、ゆらゆら…

机の下で組まれた彼女の細い足を眺めながら、ぼんやり思った。

一定のリズムで揺れ続けているもんだから、
どうしても意識がそっちへいつてしまう。

何度も彼女の足から目を逸^そらして
窓の外を眺めてみてはいるんだが…

ダメだ。

どうしたって目の端に貧乏ゆすりが入ってくる。
もう一度横目で、腰、スカート、ふくらはぎ、と舐^なめるように見る。
思わず顔がニヤける。

（揺れてる足って、やらしい。）

「トカゲ！」

突然、われるほどの怒鳴^{どな}り声が教室にひびいた。

とつさに黒板へ顔を向ける。

「女子ばかり眺めてないで、ノート取れノートお！」

反射的にニヤけた顔が元に戻る。

教室の空気が凍りつき、シンと静まり返った。

「……えつと、僕？」

指で自分を指し、首を傾^{かた}げた。

それまでチョークで黒板を打ちつけていた教師^{せんせい}が、振り返って僕をにらんでいたからだ。

「当たり前だ、お前以外に誰がいる？」

斜め前の女の子がげげんな目つきで僕を振り返る。

「えつと……とってますよ、ノートなら」

やれやれとノートを頭上にあげて淡白に答えると、どこからともなくクスクスと笑い声が聞こえてきた。

「嘘を言うな！ 女子をみてたろうが！ 反吐^{へど}が出るわ、気色の悪い。」

そう、先生が吐き捨てる。

（気色悪い？ 反吐が出る？ 僕が？）

教室にじわじわと「いつものこと」という空気が漂っていくのがわかる。

僕がこんなふうに馬鹿にされるのは「いつものこと」なのだ。だけ

ど…

「すみません、ボク、彼女の貧乏ゆすりが気になっちゃって」
悪びれたように装って「てへ」と笑った。

直後、ひそやかな笑い声だけが浮かんでいた教室に、
どつと揺れるほどの笑い声がおこった。

斜め前の彼女が真っ赤になって「信じられない」という顔で僕をにらむ。

（嘘じゃない。気になったっていうのは「いい意味で」だし）

僕はとっさに彼女に微笑んでみせた。

だけど彼女はさっと前をむいて、さっきまで組んでいた足をかたく閉じてしまった。

残念。

これで彼女の貧乏ゆすりをしばらく見れない。
そう思っで、ふっと頭を垂れた。

（「おいトカゲ、そいつの貧乏ゆすりエロいだろ？」）
がやがやという教室の雑音に混じって、

（「ホモ野郎には刺激が強すぎたかあ？」）

聞こえてくるのは、悪意に満ちた声たち。

（「トカゲ、俺に掘られてみるか？」）

それは自然に連鎖していくもので

（「バカ、トカゲは、掘り専だろ」）

どれも、僕を侮辱する言葉なのだ。

（「ははは、そいつはダメだ。俺、痛えのはカンベン」）

構うもんか…

首を折り曲げたまま、僕は心は麻痺させる。

（「何がカンベンだよ、ドMのクセして」）

（「笑うなよ、トカゲに掘られるのはカンベンなんだよ」）

（「それはそうだな、ははは」）

どれもこれも、あからさまな僕への侮蔑の言葉。
聞く価値もない言葉だ。

「おいそこ、全部聞こえてるぞ」
教師が溜息交じりに話を擲する。

僕に怒鳴る声とは全然違う、怒りのない声だ。

「さーせん、せんせ」

「えへへ、つい」

適当に謝って黙る彼らに

「静かにな」

とだけ言って、教師はまた黒板にチョークを打ちつけはじめる。
がりがり、がりがり。

チョークと黒板の表面が擦れる不快な音が響きはじめる。

（…僕以外、お咎めなし、か。）

慣れている。

こんなこと、慣れてるはずだ。

そう思えば、どうってことはない。

僕の名前は「サラ」という。

でも、この名前で僕を呼ぶ人はほとんどいない。
学校の人はだいたい「トカゲ」って呼ぶ。

僕のことを馬鹿にするやつらは、そう呼ぶんだ。

さつきも先生が僕をそう呼んで怒鳴った。

あんなにひどく叱られるのは学校中でも僕くらいで、
ほかのやつらはだいたい可愛がられている。

なんたってこの学校じゃ、生徒は「生徒様」。

お客様扱いされてるんだ。

あれはそう、桜舞うあたたかな春の日のこと。

——かしこき、かしこき、「生徒様」に「保護者様」。

本日は本校へ足をお運びいただきまして、誠に、誠にありがとうございます。

えー、早速ではございますが、

本校の経営理念は「来るもの拒まず、出るもの追わず」でございます。

ええ、仰る通り。

これは同時に、本校の教育理念でございます。

ええ、コレをいただければ何でもござれ（と腹のあたりで親指と人指し指で丸を作る）でして。

はい、保護者様の御同意を頂戴いたしますれば、大事な生徒様を保護させていただきます。

さしずめ、保護者代行といったところでございますよ。

ええ、はい。

もちろん、環境は整えてございます。

心配ございません。

はい、それはもう、ご入学頂ければ満足いただけること間違いございませんから。

ええ。

はい。

は…在学期間でございますか？

そうですね、極端な話…ございませ、ん。

え、それはもう、保護者の方のお気に召すままに、ということでございます。

極端な話ではございます、あくまで。
ええ。

現在本校の最高学年は三十一年生となっておりますので、ええ。
まあ、極端な話、ですけどね――

僕の記憶の断片。

入学説明会での教頭の演説だ。

熱心に聞き入っていたのは保護者だけで、
僕はといえば教頭のタコ頭に夢中だった。
ぴかりと光ったその皮膚に指を触れたら、どんな具合だろうか、と。

ただ一つ耳に残った

「かしこき生徒様」
という言葉。

意味は入学してすぐにわかった。

それは名ばかりの「僕ら」という物品のこと。

持ち主は「保護者様」。

そして学校は、それを保管しておく金庫。

こうして学校のシステムは、単純明快というわけになる。
だからこの学校は、生徒を「生徒様」と呼んであがめ奉っているの
だ。

入学式。

僕も含めた新入生たちはむやみやたらと誉められ、おだてられた。

「かしこき生徒様」

「うるわしき生徒様」

「本日より」

「御身お預かりいたします」

「証明書へのサインと印を」

「保護者様とのお別れを」

「保護者様のご退場なさいます」

「さて生徒様」

「これからの生活につきましては」

「書面にて説明させていただいておりますので」

「後ほど御一読をいただきたく」

「では本日は入寮の日となっておりますので」

「では生徒様もご退場いただきまして」

「私ども教師陣に従っていただきたく」

「なにとぞよろしくお願いいたします」

気を悪くするはずはなかった。

むしろ気味が悪いというのが皆の本音だったと思う。

学校の丁寧な態度は一貫したものだった。

そして、それに乗じて僕らはおかしくなっていたんだ。

それは言わば、モラルが欠如した世界の縮図。

とにかく教師は、怒らなかった。

この学校に教師せんせいの役目は「生徒様」の機嫌をとって、お守りをする
こと。

ほほえんで世話をすれば、それで事足りるというわけだ。

僕はといえば

授業中は沈黙を守ればそれでよしとされ、
学問的知識の習得などハナから期待されていなかった。
学習の評価は2種評価。

「C」、もしくは「限りなくFに近いC」。

Cは合格を意味し、Fは落第を意味する。

つまり、どんなに努力してもCまでの評価しか与えられない。

逆を言えば、まったく頑張らず限りなく落第であっても

確実に「C」は与えられる。

この評価法は、学校が考案した「学習意欲削ぎ取りプログラム」の
一つ。

この評価のおかげで、僕ら「生徒様」は学習する目的を失った。

それまで僕は評価されるためだけに学習してきていただけに、
痛手といえば痛手だった。

「誉められるような行いをしなさい」

「世間で評価されるようになりなさい」

「そのために良い成績をとりなさい」

「家族のために、立派な大人になりなさい」

この学校に預けられて、僕らにはそれらの必要がなくなったのだ。

もはや僕らが学習をすることに何ら意味はなくなった。

僕らは学校に預けられている保管物。

二重ロックで守られた校舎の中で、

決められた栄養を補給しながら生きながらえている。

まるで温室の植物。

そんな生活の中での墮落は、ほとんど快樂に近かった。

何をしても許される。

何もかも手に入る。

何もかもが自由。

毎日が休日。

終わりのない長期休暇。

金によって保証される空間・時間。

しかしそんな生活に突如、一点の曇りが宿った。

「フラストレーション」

とめどなく与え続けられる自由への恐れ。

不可解な焦燥感。

もてあます時間との戦い。

やがて自己矛盾をきたした僕らは、みな一様に壊れていった。

最初は本当にささいなことだったんだ。
誰かが言い出した一言。

「トカゲをはずそう」

そんなわけで僕は例外になっていった。

いつだって馬鹿にされて
それが当たり前になったんだ。

僕がはずされた理由はわかっている。
僕に右腕がないからだ。

僕は左腕しか持って生まれてこなかった。
右肩からすっぱり何もない。
それでも僕は、わりとうまくやってると思う。
これまでも、これからも。

（「おつと…」）

先生がまた僕のほうを見ていた。やばい、やばい。ノートをとるフリをしなきゃ。

あの教師は、特に僕を馬鹿にする。^{せんせい}

不具の有機物を認められないのだろうか。

気持ちはわからないではない。
だからってわけじゃないけど、今はペンを握って彼の注意に従うま
でだ。

「！」

突然の違和感。

左の掌がねつとりとしている。

わずかに液体がもれ出てきていた。

（欲求不満…？ まさか）

さっき、女の子の足を見ていたせいなのか。
さつと机の上に掌を拡げる。

まじまじと見るまでもなく、じくじくと粘液があふれ出ていた。
困った。

誰にも見られまいと、さつと膝の上に手をやって机で隠す。

今は授業中。

処理しようにも、無理だ。

しかも授業はあと三十分はある。

（嫌だな。どうしたら…？）

きよろきよろとまわりを見るけど、僕を助けてくれる人なんていない。

でもいつもは、確かにいる。

今はたまたま、あの笑顔がないだけで…

黄金色の髪。

朗らかな声。

「ジョー」の笑顔。

（もしかしてジョーがいないから？ だから欲求不満なのか？）

そう思い当たって、先週の金曜のことが色鮮やかに甦った。

学校の傍の小高い山の上に、屋根の高い教会があった。

それはジョーが最初に見つけたやつで、

先週の金曜「今度そこに行ってみよう」と二人で約束した。

だけど、それからずっとジョーには会えないでいる。

今日はもう金曜。

あれから一週間、ジョーはずっと学校を休んでいる。

昨日、心配になってジョーのママに電話したら、

ジョーは家には帰っていないという。

ジョーのママは豪快な人で、

「旅にでも出たんでしょ、これでバカ高い学費を納めなくて済むわ。

食い扶持も減って助かるし」

と言ってからからと笑っていた。

僕はそれを聞いて泣きたい気持ちになった。

（ジョー……どこ行っただろ。）

とまあそんなわけで、一週間でジョー失踪の噂はひそやかに広がっていった。

事故にあったとか、入院したとか、自殺したとか、そういうごくありきたりな「噂」としての「噂」で。

女の子達は噂が好きだ。

僕は女の子達のそういうところが、嫌いじゃない。
むしろ、好き。

噂話をしているときの女の子達は可愛い。

集まってひそひそと話す仕草は、とても女らしいと思う。

「ひそひそ、ひそひそ」

本当にそんなふういきこえるから不思議だ。

僕は自然体な女の子が好きだ。

だから、彼女達の作る噂は可愛いんだ。

でも、その他愛もない噂が、完全に否定されてしまうとは、ね。

——ここ最近、無気力の生徒様が増えておられます。

具体的に申し上げますと…

二回生の生徒様の中で、一週間の自主休学をなされた方がおられます。

こちらとしては誠に残念なことではございますが…

生徒様の御意思を尊重し、

自主性を重んじ、

ひいては保護者様の教育観に配慮いたしました結果、

自主休学を認めることとなりました。

期間は一ヶ月といたしました。

満了となった際は、

更新手続きの有無により、

生徒様の管理の在り方を決定してゆく方針でございます。

また、期間中の学費・共益費・雑費等につきましては通常通りの御支払い額を請求させていただきます。

よって生徒様への詮索や搜索は控えていただきますよう、よろしく
お願いいたします——

そう。

昨日の朝礼でジョーは、「自主休学の生徒様」という烙印を押されたのだ。

話にならない。

全部でたらめだ。

ジョーは家に帰っていないだけだ。

それなのに自主休学なんて、どうかしてる。

これは「見せしめ」にすぎない。

学校のたくらみなのか？

疑う気持ちが膨れ上がっていった。

僕は14歳。

もうだいたいのことが、わかる。

ジョーは学校から一時的に切り捨てられたのだろうか。

いや、切捨てられただけならまだいい。

学校は「ジョー失踪」を利用して、

自主休学処分の妥当性を示し、

かつ自主休学を生徒の脳に印象付けた。

「自主休学」

甘い罠だな、と思った。

この学校の「生徒様」が安易にくいつきそうな罠だ、と。

そして、また一週間経った。

案の定、ジョーに影響されて自主休学を言い出す生徒が相当数出て、7回生のある教室が学級閉鎖になったらしい。

噂は、どこからともなく耳に入ってきた。

しかしそれとは全然別のところで、
とんでもなく根も葉もない噂が広がっていた。

『トカゲと付き合ってたから、ジョーは焼かれちゃった』

噂を広めたのは、ドーイだ。

「ほら吹きドーイ」

「いじめっこドーイ」

ドーイが「ほら吹き」だの「いじめっこ」だの、
そんな生優しいやつじゃないことは、みんな知っている。

ドーイの理念は

「やる時は徹底的・いじめる時は殺す時」

ドーイはやっかいなやつなんだ。

粘つく掌をズボンに擦りつけながら、苦々しい気持ちになった。

ドイと同じくらい、この手は本当にやっかいだ。
所構わず粘液を吐き出す。

でも、今にはじまったことじゃない。

僕が十歳になった時から、ずっとなんだ。

僕の左の掌は突然、液体を出したり、火を吹いたりする。

ただでさえ僕は、右手がないせいで馬鹿にされている。

なのにこんな左手のことがみんなに知られたら、それこそおしまい
だと思う。

だから、どれだけ馬鹿にされても、この左手のことがバレなければ
いい。

とにかく、知られるわけにはいかないんだ。

もしもバレたら……

いろんな意味で、本当に僕はここにいらなくなる。

そう思ったら、掌からまた粘液が溢れた感じがした。

こうなるのは火をふき出したくなる前触れで、

はやく手を拭いてやらないと、意思に関係なく火がふき出てしまう。

もう、ズボンでぬぐうのには限界があった。

とめどなく溢れてくる粘液は、今まで見たこともないほどの量で、
僕を不安にさせた。

一刻もはやく授業が終わることを祈る、それだけだ。

授業の終わりを告げる鐘が鳴った。
容赦なくペンをしまうガチャガチャが響いて、教師の声が掻き消されてゆく。

ほっとした。

（やっと帰れる。）

粘つく左手でノートを閉じ、荷物をまとめて、帰る支度をする。

誰かに気付かれる前に、帰らなければ……

そんな僕を、窓にもたれたドイがニヤニヤしながら見ていた。

「おいトカゲ、お前がジョーを殺ったんだって？ 可哀想に。なあ、みんな？」

ドイのとりまきがクスクスと笑う。

（馬鹿にしにきた。）

生憎僕には、彼らの相手をする余裕がない。

なぜって左手が限界だからだ。

もう、いつ火が吹き出てもおかしくない感じがしていた。

やつらには構わず、机の中のものを取り出し、鞆に詰め込む。

鞆のなかみは、どれもこれも僕が触ったものは全部、左手からあふれ出る液体がついてべとべとだ。

（家に帰って拭かないと……）

そう思つて、最後の一冊、美術のテキストを乱暴^{らんぼう}に引き抜いた途端^{とたん}、机の中からぴよろん、と一匹の蜥蜴^{とかげ}が飛び出した。

体をくねらせながらザラザラと机の上を這い回ったかと思つたら、ぴよろんと机の中へ入つて、

と思つたら、またぴよろんと中から飛び出て、ビタリと床へ落^ら下^{つか}した。

とつぜんのことに目を白黒させる。

でも、途中からドーイたちの笑い声が聞こえはじめ、その意味を理解した。

かつと苛立ちがこみあげる。

「…なんだよ、これは！」

「いいだろ、それ。お前にやるぜ？ はははははっ」

ドーイが高笑い。嫌な声だ。

悪趣味にもほどがある。

「いらない。トカゲなんて…バカにするな」

掌を握つて小さく呟いた。

ねちゃっという感触が左うで全体に伝わる。

左手のうるおいが、さっきより多くなっているような気がする。

…やばい。

止まらなくなっている。

「仲間だろ、仲良くしてやれよ」

ドーイが近付いて、耳元でささやく。

オレンジガムのおいの息が首にかかる。

胃がム力つくような匂い。

「くちゃくちゃ」と噛^かむ不快な音。

ぱつと鳥肌が立った。

「仲間じゃ、ない…」

そう答えるのが精一杯だった。

手の震えがとまらない。今にも左手から何かが出そうだ。

「そうか？　じゃあ…」

ドーイが不敵に笑った。

その歪んだ笑みにハツとする。

まさか…

「やめろっ！」

遅かった。

次の瞬間、床でによると動いていたトカゲは、ドーイの汚い靴に踏みつぶされてしまったのだ。容赦なく床に擦りつけ踏むドーイ。

まわりのやつらが「ひゅー」と無責任な歓声をあげてはやし立てる。

「おまえ、なにして…やめろよっ」

ぐちゃぐちゃとドーイの足許から粘着質な音が聞こえてくる。耳を塞ぎたくなるような音。

ドーイは冷めた目で床を見ながら「蜥蜴ちゃん、お仕置きだよ？」と唇の端を上げて笑った。

その表情にぞつとする。

（「た…助けて…サラマンドー…」）

どこからともなく聞こえた声。

悲痛なその声の主は、踏まれている蜥蜴…？

（「痛いよお、助けてえ…」）

よわ弱いその声は、僕に助けを求めていた。
やっぱり足の下のの蜥蜴の声に違いない。

「やめてっ…」

思わず耳を塞ぐ。

（僕はっ、僕はドーイの足をどかしてあげられないっ…！）

左耳の中で「ねちゃ」という水音が響く。

手からは信じられない量の液が溢れ出てきていた。
腕をつたってシャツの袖そでの中へ染み込んでいく。

（「サラマンダー、お願いだ……その手で…その手でこの足を焼いて！」）

僕には右耳を塞ぐ腕がない。

だから掠かすれた声が、右耳から頭の奥まで響ひびいてくる。

「どうしたトカゲ。真まっ青あおだぜ？」

ドーイが笑う。

このままじゃ液が出つくして、火がふき出す。

いつドーイが僕の左手の異変いへんに気付くかわからない。
動揺どうようすると、左手がじくじくと痛んだ。

い、いけない。

ここで火を撒まき散らしたら…

火を出すことを知られたら…

「もう、い、い、たくさん、だ。そいつは、僕がもらうよ……」

体を震わせ、ドーイの目を見る。

左手を耳にあてたまま許しを請う。

屈辱だった。

「ぺっ。とんだ根性なしだな」

屈服した僕の表情に満足したのか、ドーイが足をどかす。

尾と頭が胴体から切れて、くちやくちやになった蜥蜴の死骸が、そこにあつた。

「ぶっ」

ドーイと仲間たちが吹き出す。

「あゝあ、トカゲ。また殺しちまったな、オ・ト・モ・ダ・チ。はっ、はははは、可哀想によお」

ドーイは大声で言う「いくぜ？」とまわりのやつらに目配せし、さっさと教室から出て行った。

（終わった……）

と思つたのもつかの間、

入れ替わるようにして今度は学級長のミカエルがやってきた。つかつかと僕に歩み寄り、めちやくちやに怒鳴り始める。

「君！ 教室でこんな不道德なことをして、一体どういふつもりなんだい？」

ときに君、ジョー君を焼き殺したそうじゃないか、え？ これは先生方に報告させてもらうよ？

さあ、この汚物（と言つてミカエルは蜥蜴の死骸を指差した）を始末したまえ。

そして床をキレイに清掃するんだ！ さあ、はやく！」

一通り言い終え、ミカエルは「ふんっ」と鼻を鳴らして教室を出て行った。

たぶん、指導教室へ行くんだろう。

あいつは先生達の憩う指導教室が大好きなんだ。

そして風紀を乱すクラス成員——その筆頭は僕だけど——を排除しない
と気のすまない、融通の利かないやつ。

しだいにミカエルの足音が消えていった。

それにあわせて僕の胸のざわつきも、だんだんと落ち着いていく。

ややあつて教室に誰もいなくなった。

ふうつと大息をついて、そつと床に膝をつく。
掌を見ると、もう液は出ていない。

カラカラだ。

さつきはドイに挑発されて、垂れ流してしまったのだろう。

本当にあと少しで火を噴くところだった。危なかった。
でも、今はもう、大丈夫。

無惨な蜥蜴の死骸に乾いた手をかざし、僕は目を閉じる。

そして

（『善なる火を燃やし……』）

そう念じると、蜥蜴の死骸からしゅるしゅると煙が昇って、一瞬で

ぼつと火がともった。

小さく微笑んで

「ごめんよ、僕のせいだね？」

炎がすつと僕の手の中に入って、火が消える。

燃えた蜥蜴の亡骸の前で、そつと十字に左手を切った。

その後は、床に残った灰を手で集め、ハンケチに乗せて包む。
それを窓の外へ撒いた。

ざーっと灰が風に流れてゆく。

「ごめんね」

小さく言って、その風を見送った。

『サラマन्दラー』

僕の名前、「サラ」の由来。

綴り^{つづ}りは「s - a - l - a」。

火の精霊サラマन्दラーのことだ。

僕は十歳の時、サラマन्दラーになった。

善なる火を燃やすこと、そして悪なる火を消し去ること。
できるのはたったその二つ、それだけ。

それは右腕を持って生まれてこなかった僕に神様が与えてくれた、
ささやかな力、らしい。

風に乗って流れていった灰が見えなくなった。

僕は荷物をかかえて、よろよろと放課後の教室を後にした。

+

それからまた一週間たって、ひょいとジョーが帰ってきた。
「ただいま」

ジョーはそう笑って、僕の肩をぽんとたたいた。

まるで何もなかったかのようにジョーは復学した。

学校は「生徒様の復学」について、一切何も報告はしなかった。

みんな自主休学には大賛成だったらしく、ジョーにねぎらいの言葉をかけたりしていた。

クラスメイトにねぎらわれているジョーの後姿を、不思議な気持ちで僕は眺めていた。

「サラ、心配させたね。」

放課後、二人だけの教室で、ジヨ―は優しく僕を抱きしめた。

「俺、一人であの教会へ行っただ。そしたら『なんじ汝シルフなり』って声が聞こえてさ」

ジヨ―の可愛らしい顔をのぞきこんだ僕は

「シルフ？」

と首を傾げた。かた

「そう、シルフ。風を読む精霊さ。」

「風をよむ？」

「ああ」

ジヨ―がうなづく。

「サラはサラマンダーだ。それと同じってことさ。俺はシルフ、風の精霊だったんだ」

ジヨ―は歌うようにそう言い、優しく僕に口付けた。

あたたかな唇がふれあって、僕の体はとろけそうになる。

「俺、嬉しくって。しばらくぼーっと風をよんでたんだ。」

そしたら三週間も経ってた。傑作けっさくだろ」

くったくのない笑顔で笑うジヨ―の笑顔。

そこへ、今度は僕からそっと口付ける。

軽い、小鳥のくちばしが触れ合うようなキス。

「ジヨ―が無事で、それだけで、僕は良いや」

「サラ。めちゃくちや好きだ」

「僕も、ふふ」

またキス。

今度は、ゆっくりと。

唇が触れ合う時間は、どうしてこんなに美しいんだろう。

…

名残惜し気に唇が離れた。

向かい合ったジョーは、ハツとするほどせつなげで、

僕は泣きたくなる。

「特別きれいな風をみたよ。」

そのままの顔でジョーが言う。

「特別？」

「見せたかったな。まるで泣いているみたいな風だった。

苦痛にじゃないんだ。

きつと良い死に方、いや、良い看取られ方をしたんだろうな。」

「そんなふうに風が見えるんだ」

微笑んでジョーを見る。

「うん」とジョー。

「ねえサラ、キミのこと教えてくれよ」

ジョーが額を擦り付けながら言う。

「僕のこと？」

「そうさ、キミのこと。火を使うだろう？」

僕の左手に自分の手を絡めながら「どんなふうに火が出るの？」と
甘くささやく。

そんなふうにされたら…

「あ、ああ、いいけど、まずは、父さんの話をきいてくれる？」
紅潮した顔を見られるのが恥ずかしくて、さっとうつむいた。

「パパの話い？」

ジヨーは少し不満そうだ。

「僕の力は、父ゆずりのものだから……」

「ふうん」

拗^すねたようなジヨー。

機嫌を損ねたかと心配になって、慌ててまぶたにキスを降らす。
するとジヨーが僕の腰にきゅっとしがみついてくる。

なんて可愛いんだろう。

「僕の話、きいてくれるんだ」

「いいよ」

ジヨーの素直さは、前とぜんぜん変わっていなかった。

「僕のママがトカゲ男と一緒に暮らし始めたのは、
今からだいたい十五年くらい前のことで……」

ふふ、くすぐりたいよ。

それからしばらくして、僕が生まれたんだ。」

「なんだよそれ。パパのことだろう？」

ジヨーが耳^{みみ}に^{たぶ}に噛^かみ付く。

「まあ、聞いて。」

僕が産まれた日からそのトカゲ男はパパになったわけで、父親気
取りで僕のことを‘坊や’って呼んだんだ。

でも、僕はあいつを認めなかった。

というより…、受け入れなかった。

嫌いでしょうがなかったんだ、トカゲ男が、ね。」

「トカゲ男って、パパのことか。嫌いだったの？」

「うん。僕がトカゲ男になる前までは、ね」

「それで？」

『パパが嫌いだった』ことに、

ジョーは少し興味を抱いたらしく、

腰にまわしていた腕をほどき僕を床に座らせ、
自分はその横にどっかりと陣取った。

「真剣に聞こう」という合図だ。

「それで？ はやく、続き」

「うん。パパは僕の敵だったんだ。」

「敵？」

そう、と頷いて、こつと額をつける。

「毎日、ママを奪い合ってた。」

ジョーが驚いて目を見開く。

「ママを？」

ああ、と低く言って目を閉じる。

「それで」

唇にあたたかな肉感。

せつかく横に並んだはずが、また向かい合ってキスしている。

ジョーが離れるのを待ってから

「…それで、十歳になるほんの少し前、ママをパパから奪い取ろう
と思っ、て、ね。」

「なんだよそれ。サラ、可愛いじゃない。」

僕の腕のない右肩——本当は腕の生えるべき箇所——を、ジョーが
愛撫する。

「今よりは可愛かったのかな。でも、パパのことは本当に嫌いだったんだ。」

「パパ、可愛いそうだね」

僕をくるつと後ろへ向かせ、ジョーが背後から抱きしめてくる。

ジョーはこうするのが好きなんだ。

「それで、奪い取れたの？」

ジョーが後ろから耳元へ甘い息をかける。

ドイのものとは比べられない、いい香りのする吐息だ。

「奪い取れたか」という質問になのか、それとも快感にあらがうようになのか、

僕は首を横にふった。

「ダメじゃん」

ジョーが強く抱きしめてくる。

胸の熱さが背中から伝わってくる。

「でも、やってみたんだよ？ 失敗しちゃったけど」

甘えるようにジョーの腕を掴む。

三週間、触れられなかった腕だ。

「で、どんなことやったの？ 9歳のサラは」

「…天井からぶらさがる遊び」

少しためらってから、小さく答えた。

「なにそれ？」

後ろにいるジョーが、戯れに首にキスする。

「まあ、聞いて…ねえ、くすぐりたい」

「きいてる、早く話して」

（ジョーがそんなことするから、うまく話できないのに）

ジョーは僕をむらむらさせる。

なんだかとても幸福だ。

「僕の家ってね」

「うん」

ジョーが僕を抱きしめたままあいつちを打つ。

「ちよつと変わってたんだよ、昔から」

ジョーの体温につつまれながら、記憶が9歳のころへ引き戻されて

い
っ
た。

小さなイスに両足を乗せて、天井にくっついていてる扉に手を伸ばす。イスの上で、つま先立ち。

めいっばいに体を伸ばすけど、あとちょっとのところで指先が届かない。

さっきからイスがカタカタ。

気になってしょうがない。

選んだイスが悪かったなあ。

まさかこんなにもバランスの悪いイスだったなんて。

家のイスの中で、一番高いのを取ってきた。

欲張りだったな。

完全にそれが裏目に出た。

でも、「高さ」は必要だった。

ピアノのイスじゃ足りない気がしたし、

かといってあのでっかい脚立をここまで運べるほど、

僕は力持ちじゃあない。

だから、猫脚になってる花台の椅子をちょっと拝借したわけだけど

……

脚が、細すぎたなあ……

うん、細すぎた。

僕がのぼると、細い脚が弓みたいになって、

「ぎぎっ」って折れそうな音がある。

今も僕が少しでも動けば、もれなく音が出て

「みしっ」て鳴ると、かなり恐い。

(…倒れるかな。

倒れるかもしれないけど、でも、たぶん大丈夫だろ、うん大丈夫。

）

さっきからそう言い聞かせてみてはいる。

なんたつて、この扉をあけるまで絶対に倒れるわけにはいかないんだから。

この扉をあけて、トカゲ男からママを助けなくっちゃならない。それが僕の使命。

ことのはじまりは、ほんの少し前の出来事に遡る。さかのぼ

「シーラ」

あいつがママの名前を気安く呼びながら近付いた。それが僕の戦いの始まりの合図だった。

それまでママと僕は、二人だけの時間を過ごしていた。ママが僕の傍にいて、僕の頭を撫でてくれていた。

それなのに、あのトカゲ男がのこのこやってきやがって！

「シーラ、さあ、その手を」

あいつはいつもの通り、グレーの燕尾に山高帽子を被って、ママの前へ手を差し出した。恭しくママの足許に膝をついて。うやうや

ちっ。

いけすかない男。
気取ってやがる。

思い出すだけで、腹が立つ。

あれは、あいつがママを誘うやりかたなんだ。

黄金色の髪に、エメラルドの瞳。

細い首。

しなるような長い指に、キメ細やかな肌の手。

長い脚。

トカゲだから知らないけど、全身に妙な光沢がある。

髪がかたくて肌もごわごわな僕には、似ても似つかない男。

ママはあいつに手を差し伸べられると、うっとり微笑んで、その手にそつと自分の手を乗せちゃうんだ。

そう、あれは、トカゲ男が使う魔法の一つだから。

魔法には叶わない。

僕がいくらママのそばに駆け寄って

「ダメだよ、ママ！」

って叫んでみたって、

ママはあいつに手を引かれていつちゃうんだ。

ママは昔、あいつにたぶらかされたにちがいない。

それからあいつの建てたこの城に軟禁されて、

最悪なことに僕を産んでしまった。

だからママは、とってもかわいそうなんだ。

湿っぽい話はおいというて。

トカゲ男の魔法その2。

天井を這って動けること。

ママの手を取った瞬間あいつは空中にとびあがって、そのまま天井にぴたりと体をはりつける。

トカゲ男だから、どんなところでも張りついて動く。重力なんておかまいなし。

あいつは体からネバネバする液体を出して、それでどこにでも張り付いて動けるらしい。

どこぞの蜘蛛男ではないけれど、

トカゲは粘膜を使って自由自在に這い回る生き物だ。粘膜はてらてら光って気色悪いし、

トカゲは毒を持っているから、人間には嫌われる存在。

でも実際、あいつは嫌味なくらい華麗に天井にくっついていて、葉巻をくわえていたり、魚の骨をくわえていたりもする。

僕は、そいつの息子だ。

胡散臭えガキなんだ、僕は。

そういう自分が時々、たまらなくいやになる。

あいつはママを抱いて天井に張りついて僕のほうへ微笑んで

「坊や、ママをお借りするよ?」

とやさしく言う。まるで歌うように。

「離せ、このトカゲ野郎!」

僕が叫ぶのを見届けるがはいか、

天井についた扉をそっと開けて、やつは我が家の最上・一三階へいってしまふ。

とまあ、こんな具合に、ヤツはいつだってママをさらってしまうんだ。

そして厄介なのが、僕の家事情。

円筒状の我が家は、十三階建ての高い作りになっている。

一階から十二階までは梯子や階段がついているんだけど、十二階から十三階の間には、それがない。なぜか。

理由¹。

十三階はあいつとママの特別な部屋だから。

「坊やは入っちゃダメなんだ」と、憎たらしい笑顔で何度もあいつに教え込まされた。

こんな理由にならない理由はおいとして。

我が家が十三階立てな理由²。

やつが所構わず這いずり回るから。

低いところから高いところへ這いずり回るのがあいつの趣味なんだ。悪趣味にもほどがあるだろ。

暇さえあれば家の中を下から上へざらざら這い回っているんだから、一緒に生活するほうはたまったもんじゃない。

おまけに、ママに添い寝してもらう時以外は必ずと言っていいほど天井に張り付いて眠っている。寝室の無駄だ。

さて、本命の理由³。

僕が梯子や階段から落ちてとっとと死んでしまつように、意図的に作られているから。もちろん作ったのはあいつ。

僕はずっとこの家で生活しているから慣れているけれど、たぶんはじめてこの家に足を踏み入れる人は、必ず階段や梯子から落ちるだろう。

それもこれも全部、あいつのせい。

あいつの粘膜がところどころ剥がれて、階段や梯子についているせい。

あいつの撒き散らす粘膜は、昼間は見えにくくって危ないんだ。踏めば間違はなく足を滑らせる。

少なくとも、僕は何度もそうなりかけた。

しかも夜になると光りだす。

不気味でとても眠れたものではない。

特に寒い夜は格別に良く光って、見ていると眩暈を起こしそうになる。

でも、僕はそれらの‘嫌がらせ’は、軽やかにかわしてきた。

どうやら僕には天武の反射神経のようなものが備わっているらしいし、

恐いものへの耐久力もあるらしい。

それがあの“トカゲ男”の遺伝子のおかげだとは、思いたくないところだけど…。

そして今。

僕は一三階への唯一の入り口——天井についた扉——へと手を伸ばしている。

「あと、あと、す、こし……」

中指か、人差し指か、かすかに天井に触れそうな感じ。

（この扉のむこうへ、行くんだ。）

トカゲ男からママを救いたい。

ママを、取り返したい。

いつもいつも、幼いころ（と言ってもまだ僕は9歳だけど）からずっと思っていたこと。

ぐつと足先に力を込めて、背筋を伸ばす。

腕から首から、全ての神経が伸びに伸びた。

（届けっ……）

そんな必死の願いが通じたのか、

それとも一瞬にして僕の身長が伸びたのか、
次の瞬間扉に手が触れた。

（「やった！」）

と、叫んだ途端、

体を支えていたイスががたと音を立て床に転がり、僕は足場を失

う。

あっ

と言う間もなく僕はイスから転げ落ちた。

と思った。

でも神は僕を見捨てなかった！

僕の伸ばしに伸ばした左手は、天井についた扉の取っ手をしっかりと握っていたのだ。

（よ、よかった…）

今までの苦労が水の泡にならないで済んだこと、イスから転げ落ちて痛い目に合わずに済んだこと、あといろいろ、いろんな意味で僕は神に感謝した。

なにより、

このまま取っ手を引けば、おのずと十三階へ行ける！

幸いにして体を支える左手はまだまだ元気で、体全体を支えているとは思えないほど、痛みも重みも感じなかった。扉を開けるのはたやすい。

このまま引けば大丈夫。いける。

…って、アレ？

もしかしなくてもこれ、押すタイプの扉？

僕がぶら下がって開かないってことは、押さなきゃ開かないってことか？

しまった……この状態じゃあ、絶対に押せない。
不可能だ。

残念ながら僕は、ルパンじゃない。
ましてやあのトカゲ男みたいに魔法が使えるわけじゃない。

…ちくしょう、このままどうしたらいいんだっ

イスの脚が高かった分、降りるに降りられないはずだ。
下をちらつと見る。

予想通り、高い。

はっ

よく見ると、床にはあいつが残っていたのか、ねらねらと光る粘
液がかすかに見えた。

（だからイスが揺れたのか！？）

やつの周到なまでの嫌がらせに呆然としながらも、高さにおののく。
…こ、こわい。

そう思った途端、左手に痛みが走った。

ずしんと体中の重みがかかった左手は、取っ手を握ったまま硬直し
てしまった。

なんてことだ。

背中を一すじの汗が流れる。

キーホルダーのように天井からぶらさがった僕。

体は完全に硬直し、床に転がったイスだけがカタカタと不安気な音
を立てた。

粘膜の上に転がったせいだろうか、小刻みに揺れ続けている。

と、いうことは…？

また、はっとした。

ということは、今僕が床に落下したら、粘膜で滑るのではないだろうか？

今まで軽やかにかわしてきた

「粘膜ですってんころりん」

を、まさに体験することになるのではないだろうか…？

（そんなの、カッコ悪すぎる！）

と、威勢よく思ったのは一瞬で、次の一瞬で、もう何もかもどうでも良くなっていくような、諦めにも似た気持ちが溢れてきた。

トカゲ男に、僕は叶わない……

全身が痺れてきた。

もう、ダメだ。

僕はなんで、こんなことをしてるんだ？

ママを救う？

何のために？

あいつが憎い？

いや、

今までだつてずっと、こんな調子だったじゃないか。

あの男の横暴さも、卑劣さも。

わかりきったことじゃないか。

ぎりぎり左手が悲鳴をあげる。

（あいつなら、こんな不様なかつこうにはならないんだろうな、きつと）

痛みが度を越して、笑いがこみあげてくる。

「ふ、ふ。あははは……」

目をかたく閉じる。

このまま待ったってどうにもならない。

…落ちる覚悟を決めよう。

この時僕は、浅はな自分の思い付きを呪った。

最近、「急に身長が伸びた」とママが言ってくれたのをいいことに、前々から目をつけていた花台の椅子をわざわざ6階から運んできて、あいつのいる一三階へ忍び込もうなんて。

そしてこれだ、この不様な恰好。

こんな姿あの男に見られたら、鼻で笑われるに決まってる。

ママだって、僕を情けなく思うだろう。

でも、でも僕は今日、ママを救わなくちゃならないと思ったんだ。理由なんてわからない。

衝動的にあの男からママを奪いたくなった。

あいつのツンとした鼻をへし折って、

今度は僕が、ママをさらうんだ、と。

まあ、今さら何を思っても始まらない。

この状況から目的を達成するのは、もう不可能だ。

諦めの気持ちが、心を支配していく。

僕は人の子で、トカゲ男になんてかなうはずがなかったんだ。そう思う。

でも、なにかもやもやとしたこの感情が、僕の左手を、ドアの取っ手に繋ぎとめている。

（「いいかい坊や？」）

ふっと、昔の記憶が走馬燈のように甦った。

（「善なる火を燃やし、悪なる火を消し去る」）
あいつの言葉。

僕の耳元でささやく、甘い言葉だ。

（「それがキミの力。いいかい？」）

僕がまだママのおなかにいたころの、幻。

（「困った時は、この言葉を唱えるんだよ、坊や」）

ぼんやりと浮かんだ光景。

ママがゆり椅子に腰掛けている。

その横でママの手を握り、あの男がささやいている。

ママのおなかはぼっこりとふくらんでいるようだ。

おなかのふくらみは、僕？

（「いいかい、僕の坊や。」）

違う。僕は…

「…ぜんなるひ、を、もやし…あくなるひを…あぁっ」

左手が限界だ。ぶるぶる震えてしまう。

（坊や、いいかい？ 困った時は唱えるんだよ。）

ママのおなかにいるときから聞かされた言葉が。
ノドが震えて、自然にその言葉が出る。

「けっ…しさる…」

トカゲ。火の精霊。

でもまだ僕は、9歳。

僕は、トカゲと人の間にいるんだ。

沈黙、数秒。

ちくしょう…何にもならない…

困ったとき唱えたっていうのに！

涎がだらりと顎を伝う。

息が苦しい。

転がり落ちたら、地獄。

このままぶらさがったままでも、地獄。

もういつそ落ちてしまったほうが楽に違いない。

でも、でも、あいつの粘膜で滑るのはゴメンだし、

でも、でも、でも、もう、もう左手がちぎれる。

もうダメだっ…あ…お、ち、る…

と、思った瞬間。

ぐいっ上に引き上げられる感覚と共に

「坊や、何してる」と、あいつの声。

一三階の床から扉が開き、やつが俺の左手を取ったのだった。

一瞥、^{いちべつ}まさにトカゲの微笑み。

僕は引き抜かれたにんじんのように高々とヤツに持ち上げられ、
美しい顔とばつちり向かい合う。

「こんなによだれを垂らして。坊や、何してた？」

そつと顎をつかまれ、息も絶え絶えの顔を覗き込まれる。

「一ちょう前にサラマンダー気取りか？」

ヤツはそう囁いて、

僕のだらしなく開いた唇を自分のそれで塞いだ。

「んっ」

！

ぞくつとしたのは一瞬で、

その後はただただされるがままだった。

嫌悪感？

いや、それはない。

冷めた視線に、ひんやりとした粘膜、冷酷な態度。
それとは相容れない、暖かな唇。

「まさか、この扉に張り付くのがはじめてとはね」
ゆつくりと唇が離れ、見たこともない穏やかな瞳でやつが微笑む。

「ちがう、張り付いてなんて…」
ん？

と聞き返したヤツは妙に笑顔だった。

「…僕は、お前とは違う」

おや、と不思議そうな顔を一瞬見せたヤツが、また不敵に笑う。
「坊や、手がネバついてるのに気付いていない？」

（手？）

くいつとヤツに左手をとられ、
自分の掌を目の前に差し出される。

「あ…」

眼前の僕の掌から、とめどなく液体が溢れて出ていた。
てらてらと光るそれは、間違いなくこいつの出す粘液と同じものだった。

「ね？」

「これ……」

予感がなかったわけではない。

最近どうもおかしいと感じてはいた。

異常なほどのママへの執着心。

加えてこいつへの嫉妬心。

誰かに仕組まれているのかと思うほど、
自分の感情を制御できなくなっていた。

今までずっとコイツのことが嫌いだったのは、確かだ。

でも今日は…今の僕は…

ママを取り返したいという気持ちに力こ付けて、
コイツを越えたいっていう気持ちがあった…

それは間違いのないことで。

「今、ママが眠ったところだ。静かに眠れるんだったら、ベッドへ
行きなさい。」

やつが顎で示すベッドを見た。

長い髪をまとって、ママがやすらかに眠っている。

「でも、ここは、入っちゃいけないって…」

…戦意、喪失。

完全に僕の負けだ。

「坊や。君はわかっていて扉をあけようとしたのだろう?」

やれやれという風にやつが髪を掻きあげる。

「…ご、めんなさい」

「なぜ謝る?」

「え」

「なぜ、入ろうとした? そしてなぜ、謝るんだい? 危ないとわ
かっていたらうに」

やつが試すように僕を見下す。

「…マ、ママが、好きだから」

もごもごと答える。

「それはパパもだ。理由にならないさ」

立ちふさがるヤツの目は穏やかだ。
いつもの見下す目とは少し違う。

……本心を言う必要が、あるのだろうか。

「…僕は、お前に負けない」

ためらいがちに言うと、やつは「ふっ」と笑って

「お前とは？」

と、また試すように問ってくる。

そんなのわかりきってる。「お、お前だよ、おま」

「え」と言いかけて言葉が途切れ、ヤツに抱きすくめられた。
長い腕が僕の背で交差し、温かさがじかに伝わる。

ヤツのとりけるような髪がふんわりと顔にかかって、
そこから放たれる甘い香が鼻の奥をついた。

ママの香り？

いや、こいつの香りだ。

ママを誘う時と同じように膝をついて、
僕の肩をぎゅっと抱くトカゲ男。

僕はあらがえないまま、抱きしめられていた。

「それでこそだ、坊や…愛してる」

あいつがそつと耳元でささやく。

息が耳にかかって、

全身が粘膜につつまれているような感覚になる。

「よくできました。…さ、ママが待ってる」

そう言つて僕を解放したやつは、

やはり穏やかな目で僕を見おろしている。

目がそらずにじっとしていると、ヤツが僕の髪を撫でる。

「歩けないか？」

「う…」

こくつと頷いた僕をさつと抱きかかえ、

トカゲ男はベッドへ向かった。

ママの眠るベッドは今まで見たこともないような大きさの代物で、蒼白い光を持っていた。

ふわつとケットをまくつてヤツが、

「さ、坊や」と僕に入るよう促す。

もぞもぞ中へもぐると、

ママの髪がビロードのように広がっていた。

「さ、ママを起こさないように、寝てしまおう」

ママの隣に、僕。

僕の隣に、トカゲ男。

ヤツはベッドからはみ出しそうになりながら入っている。

「坊や、いいかい？」

小声でささやくヤツの方へ顔をむけると、また抱きすくめられた。

「キミはサラマンダー」

「サラマ…」

「情熱をつかさどる、おちびさんさ」

ドキリとした。

それは、あまりに悲しい声だったから。

「いや、だ…」

「パパのように、なりたくはない？」

やつの燕尾のジャケットの胸元が、蒼白い光の中で輝いて見える。

「なりたく…ない」

「でも、明日から坊やも、天井を這いずり回りたくてしょうがなくなる」

がばっと起き上がって「うそだ！」と叫ぼうとする僕を、
なだめるようにヤツがベッドへ押し戻す。

「しっ、ママが寝てる」

人差し指を僕の唇にあて、ちらっとママへ目を配る。

また僕へ目を戻すと

「坊や、愛してる」

とささやく。また甘い声だった。

「う、るさい…」

なぜだろう、涙がこぼれた。

それを見咎められ、長い指で目尻をぬぐわれる。

「大丈夫、坊やは坊や。何も変わりはない」

あやすように言うやつ声が、少し震えているように聞こえた。
泣いている？

「僕は、人だ…」

「そう。そして、トカゲでもある」

「いやだ！」

「こら、静かに、な」

またヤツが、僕をベッドに押し戻す。

「ママはサラマンダーのパパを愛してくれた。

坊やも、愛してくれる人が、きっといるさ。

それにパパもママも、坊やを愛してる。」

「…そんなこと、言わないで」

「今日は坊やがサラマンダーになった日。おめでたいことなんだよ？」

「…もう、言わないで、お願いだから…」

涙が止まらなかった。

こうなる日が来るのはわかっていた。

いつか、僕の体からネバネバしたやつが出てくるようになること。

僕がコイツと同じように壁や天井を這いずり回る日が来ること。

でも僕は今まで、目をそらしてきた。

こいつと同じになるのがいやで。

ママに嫌わるのが恐くて。

「坊や、恐いんだね」

抱きしめているヤツの腕にしがみついて、嗚咽を殺した。

「僕は、くっ……トカゲじゃない……」

ふつと長い溜息がヤツの口から漏れ、僕の前髪を揺らす。

「坊や、夜は誰でも感傷的になるものさ。

さ、眠ってしまおう。

今夜はパパが、抱きしめててあげるから」

チュッと僕の額に口付けをして、やつは黙った。

そのまま眠りについたのか、

しばらくすると、すやすやと規則正しい寝息が聞こえはじめた。

僕はその寝息をききながら、眠りに落ちていった。

翌朝。

僕は天井に張り付いた恰好で目覚めた。

はっと目をさました瞬間、

ベッドの中で眠るママとヤツが視界にとびこんできた。

幽体離脱？

一瞬そんな超常現象を疑ったが、

昨日眠ったはずの自分の体はベッドの中にはなく、

ママとやつの間にあった不自然な隙間が、

ほんの少し前まで僕がそこで眠っていたことを物語っていた。

「な……んで？」

小さく言ったつもりが、

その声でベッドの中のママが目覚めてしまった。

うーん、と言いながら

ママの美しいまぶたが開いたり閉じたりしている。

「あら」

天井の僕と目があったママは、

別段驚くでもなく、

しかし冷静というわけでもなく、

僕を見あげた。

ややあつて

「降りられる？」

と心配そうに微笑む。

僕も微笑み返す。

だけど、えっと

……降りる？

まさか、

降りられないぞ。

「ママ、起こして、その人、お願い」

これは、あいつに聞くしかない状況だ。

確かに昨夜やつが言ったことは正しかった。

もう、天井という天井を這いずり回りたくてたまらない。
体がうずうずして
たまらない。

一刻もはやくこの天井から離れて、
一階へ行きたい。

それからここまで

天井づたいに這いずり回りたい。

「その人お？」

ママは起きぬけでとろんとした目で、
わからないというふうに首を傾げる。

「うん、ほら…そこ、横の人」

ママはやく。
じれったい。

動きたくてたまらない衝動にかられながら、
ママに懇願する。

「だれえ？」

「ほ、ほら、そこ」

やつのように天井に華麗に張り付くためには、
相当時間がかかりそうである。
まだ手も足も動かせない。

だからやつを指さそうにも、できないのだ。

「だあれ？」

ふふふーと笑うママ。

「…そこ、ほら、もう」

ママがふんわりと微笑む。

その横で、やつが美しい顔をして眠っている。

「その。ほら、…パ、パだよ、パパ！」

…とうとう言ってしまった。

今まで絶対に口にしないと決めていた言葉。

ママは僕の口から出た初めての呼称に一瞬きよんとして、

ちらつと傍らの男に目を落とした。

そして「パパ…」と眠る男の頬に手を伸ばした、その時、

「パパ、ねえ」

がばりとケットをはねて半身を起こしたヤツが、
にやりと僕を見上げた。

「坊や、今、パパと？」

横にいるママをぐいと寄せて、

「初めてだね坊や。嬉しいよ」
と微笑む。

（こ、こいつ、起きていた…！）

「い、言ってないっ」

「聞いたぞ、坊や」

にんまり笑うトカゲ男。

「言ってないってば！」

「言った。二回も言った」

「つつ…それより、おり方、おり方を教えて！」

ヤツはくくく、と笑いながらベッドから出た。

ママを姫だっこして、これ見よがしに僕を挑発する。

「坊や、『パパ、愛してる』と言ってごらん。

そしたら降ろしてやろう、ふははは」

…きつ、鬼畜…！

僕はその日、終日天井に張り付いたまま、
トカゲ男に産まれた運命を呪った。

*

「それからなんとか自力で床に降りたんだけど、
とっても大変だったってわけ…」

そこまで言い終えて

ふと後ろを見ると、

僕を後ろから抱きかかえていたジョーは、
僕にもたれかかるようにして、
すやすやと寝息をたてていた。

僕は相当夢中で話していたらしい。
全然気付かなかった。

「寝ちゃった…?」

（長くて退屈だったかな。）

けっこう頑張って話したつもりだったんだけど、
すっかりジョーは眠ってしまっている。

可愛い寝顔を見れたことは嬉しいけど、
ちよつとがっかりだ。

「ジョー、起きて、ね?」

ジョーの髪の中に手を入れて、
頭を揺する。

地肌は柔かくて、あたたかかった。

「んゝ…何？」

ジョーがまぶたをあける。

潤んだ瞳がキラキラ、美しい。

「わかった？」

「…な、にが？」

「僕のパパのこと」

ジョーは

「ぜんぜん、わかんない。」とめんと笑う。

可愛い。

「最初から、もういつかい。」

ジョーが僕の首に腕をまわして、小さくささやく。

粘液がどろっと溢れそうな感覚。

「いいよ、でも、今度は寝ちゃダメだよ？」

「うん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9656d/>

salamander

2010年10月28日06時18分発行